

対人支援点描 (25)

「面接の終結についての雑感」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

はじめに.

心理士として非常勤で勤めているクリニックで、長らく面接していた方の面接がようやく終結した。本来ならば、1年前の今頃に終結しているはずの面接であった。長引いた面接の経過をざっくりとだが振り返って、雑感を述べてみたい。

(※事例的なものや語られた言葉などは、元がわからないように改変しています)

1. トラウマ治療？

勤めている先のクリニックは、認知症高齢者を除いた成人を対象とした精神神経科の病院である。そこでは、私が EMDR や TFT など学んでいることもあり、トラウマ治療が必要とされる患者が紹介されてくる。

ある時、テレビで EMDR が紹介されたこともあり、外来患者らが急に診察時に「私も、あなたもトラウマが原因かもしれない。」「トラウマがあって、EMDR を受けたいのです。」と訴えるようになった。元々の診断名が統合失調症、発達障害、うつなどの気分障害など、いろいろな方がトラウマに原因を当てはめ EMDR を受けたいと希望を述べてきた。

確かにトラウマというと、誰もが多か

れ少なかれトラウマとなるような出来事を経験している。言ってしまうとトラウマが生じないような人生経験をせずに大人になることの方が稀有ではないかと思われる。それだけに、PTSD (や ASD) と EMDR が大々的に紹介されると、誰もがどこか自分の生きづらさの原因が、そこに結びついているかのように感じるに違いない。「私、トラウマが原因かもしれない」現象は、パーソナリティ障害、アダルトチルドレン、不適切な養育からの愛着障害と同じく、自分の生きづらさとの結びつきの中かで、どこか便利な原因探しとなりやすいのかもしれない。

また、以前の職場の浦河べてるの家で勤めていた時にも感じたことであるが、メディアがまるでそこが理想郷のような紹介をした翌日には、全国の障害当事者からの電話が鳴り、その対応に追われるような現象があった。病気や障害を抱える当人からすれば、回復への行き詰まりから何とか脱したいと思うのは致し方ないことかもしれない。現状のつらさがつらいほど、EMDR や浦河べてるの家が偶像となって輝いて見えるのだろう。

しかし、EMDR を実施し、浦河べてるの家というブランドを伴った事業所に勤めて

いた身からすれば、あっと驚くような魔法はないことを思う。地味で地道な取り組みこそが実を結ぶことを思わされる。

そんなことから、患者と支援者との間で齟齬が生じ、期待に副えないこともしばしばあった。

2. 誤った原因帰属

今回、終結した患者さんも「トラウマが原因かもしれない」という理由から、医師からの“指示を受け”面接を引き受けることになった。ここで“指示を受け”と“”で囲ったのには、二つの理由がある。ひとつは、トラウマを扱う面接に慎重でありたいから医師の指示がないと困るということである。もうひとつは、指示されてしまうと後に引けない難しさが伴いということにある。

実際にお会いしてみると、先の理由からトラウマがないとは言わないが、現状の苦労の原因は別のところにあることが多い。これまで関わった患者さんのなかには、「トラウマ治療が必要＝私、重症なの」「カウンセリングを受けている＝私、特別な存在」をアピールする方もいた。医師に極度のトラウマを訴えて面接に至った末、面接では「彼女とデートに行って、良かった」「趣味でしているボートが・・・」「この前は、コンサートで・・・」というような、私からすれば大変なリア充な話題を毎回語られる方もいたりもした。結果、私は「トラウマって何だろうか??？」と困惑することになったりする。

また、EMDR の標準的なプロトコルに当てはめるのが難しい現実もしばしばあった。たとえば、広い北海道を片道 2～3 時間かけて札幌まで通院する方、ひと月かふた月に 1 度だけ通院する方、1 回の面接に 90 分の時間が取れない方など普通に指示を受けて面接していた。患者の

EMDR の希望と現実に心理士が行えることとの間の齟齬が、ここでも生じることがあった。それでもできないならできないなりに、手立てを考えながら取り組んできた。

こうしたこともありつつ、総じて PTSD や ASD を危惧されるような重度のトラウマに悩まされる患者と出会うことが少ない現実を思わされた。

では、何が問題となるのかということ、昔の診断基準でいうような神経症的なとらわれから抜け出せないつらさや、原因をトラウマとすることで、本来の問題でないものを問題としてしまう誤った原因帰属が問題であると感じる例が多くあった。

今回、終結した面接も、そういった誤った原因帰属から抜け出すことで終わることができた。2 年半の間、紆余曲折ありつつも、ひとつの取り組みが終わったことに安堵した。

まとめ

人は何かあると理由や原因を求める。そのこと自体は、ごく自然な人の思いであることを思わされる。しかし、病を含めた人の営みは理由や原因がわかることばかりではない。それでも理由や原因を見つけることで科学が進歩してきたし、医学も発展してきた。しかし、原因ではないところに原因を求めることを始めると答えがないこと自体も問題であるが、答えがないものを探し続ける営みにも苦しむことになる。誤った原因帰属は、原因からくる問題よりも、ない答えを探し求める苦しさという苦行のような営みに苦しむことになる。そのような状態から如何に抜け出すのか、そこには認知やとらわれの問題がある。そこからの解放のきっかけは何か。気づきの瞬間が望まれる。